

特別インタビュー

苦しかったときの話をしようか

ビジネスマンの父が我が子のために書きためた「働くことの本質」

森岡 毅
Tsuyoshi Morioka



USJ大復活の立役者、森岡毅氏の苦悩の時代が生々しく語られています。

13万部突破!

ダイヤモンド社

不安と闘うあなたへ。

いま、大きな

「自分の存在価値を疑う状況に追い込まれたときは最も苦しい。」

転職、就活、異動、出向……
キャリアに悩むすべての人に

苦しかったときの話をしようか

森岡毅／著 ダイヤモンド社／出版 2019

■大島選手は子供の頃から本を読んでいたか？

「正直なところ小学校の頃はあまり本を読んでいなくて、もっと読んでおけばよかったなっと思っています。小学生の頃は文字だけというよりは絵があった方が読みやすく、読書とは言えないかもしれませんが『かいけつゾロリ』（原ゆたか）や『キャプテン翼』（高橋陽一）といった絵本や漫画が好きでした。学生時代に読んだ本で覚えているのは『泥棒は世界を救う』（赤川次郎）っていう刑事もののミステリー小説です。高校を卒業する前に読んだのかな？ もともと刑事ドラマが好きで知り合いから『泥棒は世界を救う』を勧められたんですが、すごく読みやすかったです」

■どんなときに読書をしますか？

「時間があるときにパツと思立って読むことが多いです。例えば散歩をしていて本屋さんがあったらちょっと立ち寄って、気になる本

があったら買って読むことがあります」

■最近は電子書籍を読む人も多いですが。

「僕は電子書籍はあまり得意ではないです。スマホやタブレットだと指1本で済むので、気が散ってしまうというか。本と向き合うために集中するのであれば紙の本がいいと思っています」

■では大島選手のおすすめの一冊を教えてください。

『苦しかったときの話をしようか』（森岡毅）です。タイトルからして小学生の子にはちょっと難しい内容かもしれませんが（笑）。著者の森岡毅さんはマーケティングの仕事をしている方で、わかりやすく言うと商品やサービスを作る人です。とあるテレビ番組で経営がうまくいってなかったUSJ（ユニバーサル・スタジオ・ジャパン）を森岡さんが再生させたという話が紹介されていて、本屋でたまたま森岡さんの本を見かけて読んで



川崎フロンターレ
MF10

大島 僚太

[おおしま・りょうた]

「気分転換になったり作者の思いが
伝わってくるのが読書の面白さ」

プロフィール

■1993年1月23日／静岡県静岡市出身

抜群のボールコントロールと視野の広さ、戦術眼を持ち合わせたリーグ屈指のテクニシャン。相手の読みに反して重心の逆を取る動きでボールを運び、守備でもハードワーク。チーム全体のリズムを活性化させる。

みようと思いました」

■具体的にその本のどんな部分に興味を持ったんですか？

「小説だったらストーリーに没頭しようと思って読むんですが、自己啓発本というかビジネス書みたいなジャンルであれば著者の言葉を読んで自分がどう感じるかなと思いながら読みます。実際どういう考え方をしている人なんだろう、自分に生かせることはあるのかなど。自分とは全然違う世界の人の方が気になったのと、あとはタイトルのインパクトですよ。すごい経歴を持っている人の苦しかった話ってなんだろうって」

■実際にその本を読んだ感想を教えてください。

「正直なところ前半は専門的な話が多いし知らない世界すぎて難しかったです。終盤はタイトルにある森岡さんの苦しかった頃の話で共感する部分がありました。本の帯に『君

の強みは必ず好きなことの中にある』って書いてあるんですが、他にもそういった言葉が太字で書いてあって、『なるほど、そういう風に考えるんだ』って思いました。小学生が読んで面白いかどうかはわかりませんが…。内容が難しそうだなって思ったら、最後の章から読んで大丈夫です（笑）」

■では最後に、大島選手が読書をすることで得られるものは何だと思いますか？

「物語や小説であれば僕は集中して読みたいタイプなので、いったん周りのものを全部遮断して読書に没頭します。そうすることで気持ちのリセットされて、いい気分転換にもなるんです。また作者の考えや伝えたいことが書いてある本であれば、その人のことを深く知れたり自分との違いを感じられるのが面白いです。もし興味を持った本があったら、まず手に取ってみることをオススメします。必ず自分に合う本が見つかると思います」